

鳥の渡りを解明する 鳥類標識データベースの概要と今後の展望

山崎 剛史 (財団法人山階鳥類研究所)

本講演では、山階鳥類研究所が実施している鳥類標識調査事業の概要について紹介する。

鳥類標識調査は、野鳥を生きのまま捕獲し、番号が刻印された金属製の足環等で個体識別した後、放鳥することを繰り返す研究手法である(図1、2)。後日、標識した個体が再捕獲されたり、遺体が発見されたりした場合には、個体識別番号をもとに以前の捕獲時の情報と照合が行われる。これによって渡りのルートや寿命等、鳥類についての基礎的なデータを得ることができる。

金属足環を用いる研究手法は、1890年にデンマークの鳥類学者がホシムクドリの個体識別に用いたことを皮切りにして全世界に広まった。日本では、1924年に農商務省が調査を開始したが、その後、戦争の激化等の理由で数度の中断を経験した。1961年以降は、林野庁・米軍・環境庁・環境省等の要請に基づいて山階鳥類研究所がわが国の標識調査事業を一手に引き受け、今日にまで至っている。

現在、山階鳥類研究所は、大正時代に農商務省が行った調査の結果を含む、400万件超の標識調査データを管理しており、近年は毎年およそ17万件的ペースでデータが増加している。これらのデータは、日本全国をカバーする約4,000の地点で集められた(図3)。また、データの収集には、質を担保するため、野外での鳥類の捕獲や分類・同定に関するトレーニングを積んだ“バラタクソノミスト”があたっているが、これも当研究所のデータベースの特色の一つである。山階鳥類研究所は、収集したデータの管理を行うことはもちろん、これらの調査員の育成・指導も進めている。

標識調査における野鳥の捕獲地点のデータは『生物分布情報』とみなすことができるが、そのような情報を解析する技術は、近年、飛躍的な発展を続けている。近い将来、400万件超の標識調査データと、こうした新技術が結びつくことによって、わが国の鳥類相の過去およそ85年間にわたる変遷が解明され、今後の鳥たちのゆくすえを予測することが可能になるに違いない。



図1 野鳥に金属足環を装着する



図2 使用される金属足環

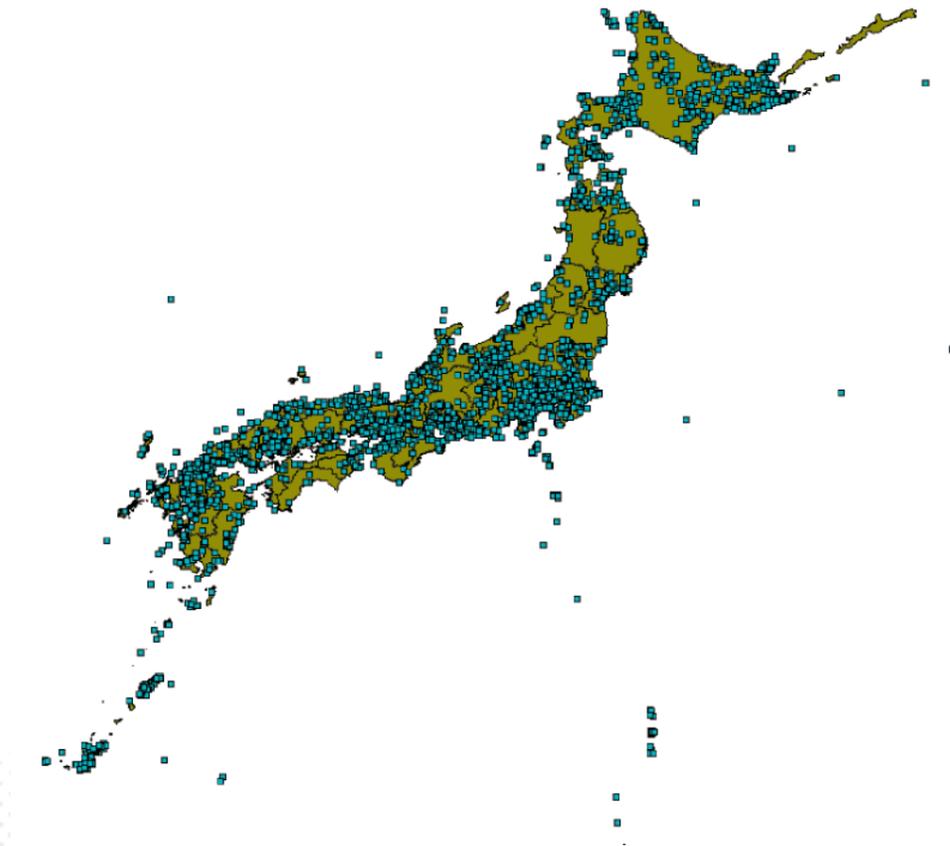


図3 約4,000地点を数える鳥類の捕獲場所